

**【目的】** 本邦において大腸癌の罹患数および死亡数は増加している。最新の研究で腸内細菌が抗腫瘍免疫応答を抑制し大腸癌の発育を促進することが示唆されている。しかし、細菌や細菌叢の変化が大腸癌による死亡の主な原因である遠隔転移や化学療法感受性に関与するかは不明である。大腸癌術後の縫合不全は重大な合併症の1つで、患者の quality of life の低下、入院期間延長、予後不良と関連することが報告されている。

**【方法】** 大腸癌原発巣および転移巣の切除標本から DNA を抽出し、大腸癌と関連することが示唆されている *Fusobacterium nucleatum*、*Escherichia coli*、*Bacteroides fragilis*、*Enterococcus faecalis*、*Bifidobacterium* の存在量を quantitative polymerase chain reaction 法を用いて測定した。

**【結果】** 大腸癌転移巣において *Fusobacterium nucleatum* が検出された症例は転移巣切除後の予後不良と関連した ( $P=0.031$ )。大腸癌原発巣組織中に *Bifidobacterium* genus ( $P=0.009$ ) が検出された症例では縫合不全発生率が有意に高かった。

大腸癌原発巣組織中の *Fusobacterium nucleatum* と予後との関係

